

メルロ＝ポンティの政治哲学は、2つの時期に区分され、そこには断絶があると考えられている。(1) 『ヒューマニズムとテロル』（1947年）や『意味と無意味』（1948年）が出版された時期には、メルロ＝ポンティは、マルクス主義にコミットしていたが、(2) 『弁証法の冒険』（1955年）が出版された1950年代中頃には、マルクス主義から離れ、「新しい自由主義 *nouveau libéralisme*」と呼ばれるものを主張するようになるのである。

本発表では、(1)の時期と(2)の時期におけるメルロ＝ポンティの政治上の立場の変化について以下のような説明を試みる。

A) メルロ＝ポンティの政治上の立場の転向と「表現」の理論との間には密接な関係がある。

ケリー・ホワイトサイド (Kerry H. Whiteside) は、(1)の時期においては、メルロ＝ポンティは歴史を「知覚 - ゲシュタルト」モデルで理解しようとしているが、ソシユールの言語学との出会い以降は、「言語」モデルへと変わっていったと考えている。このとき、ホワイトサイドが着目するのは「表現」という概念の変化である。確かに、「表現」は(1)の時期の『知覚の現象学』においても取り上げられているが、ソシユールの影響を受けて以降、言語の「表現」がメルロ＝ポンティの社会理論や歴史理論のモデルになっている。

B) メルロ＝ポンティの「表現」の理論そのものは1940年代から一貫している。

このようなメルロ＝ポンティの政治上の立場の変化を「表現」と結びつけるホワイトサイドの主張には賛同するが、(1)の時期と(2)の時期の間の「断絶」を「表現」の変化によって説明しようとするのには問題があるように思われる。というのも、ホワイトサイドは「表現」が“回顧的“なものとして捉えられることによって、メルロ＝ポンティの歴史観が変化したと考えているが、それは(1)の時期の「セザンヌの疑惑」（1945年）においても語られており、「表現」そのものが変化した結果とは考えられない。

C) 歴史理論の変化には、「表現」における暴力や浸食 (*empiétement*) の問題が関係している。

メルロ＝ポンティは、人間の共存には暴力が不可避であると考えているが、それが1949年の「メキシコ講演」において「表現」と明示的に結びつけられるようになる。つまり、暴力や浸食の問題を介して、メルロ＝ポンティの表現論は社会理論や歴史理論として深化していったのであり、政治上の立場変化はドナルド・ランデス (Donald A. Landes) の言うように「メルロ＝ポンティのマルクス主義的ヒューマニズムの自然な帰結」と考えるべきである。

● 参考文献

Landes, D. A. (2013). *Merleau-Ponty and the Paradoxes of Expression*. London: Bloomsbury Academic.

Saint Aubert, E. (2004). *Du lien des êtres aux éléments de L'être*. Paris: J.Vrin.

Whiteside, K. H. (1988). *Merleau-Ponty and the foundation of an existential politics*. Princeton: Princeton University Press.